慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本橋新材木町商業史覚書 : 問屋と街
Sub Title	Historical Study of Commerce of Downtown in Tokyo, Case of Shinzaimoku-cho, Nihonbashi
Author	白石, 孝(Shiraishi, Takashi)
Publisher	
Publication year	1997
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.40, No.5 (1997. 12) ,p.27-
JaLC DOI	
Abstract	本稿は,昭和7年に,現在の日本橋堀留町1丁目となった江戸から明治・大正・昭和にかけての古い町,新材木町の商業史視点にたつ歴史的素描である。すでにこの隣の町,新乗物町(同じ現堀留町1丁目)については,本誌40巻4号に記載してあるが,いずれも,拙著の「日本橋界隈の問屋と街」の延長線上にある研究覚書である。「新材木町」の町名由来記から始まり,江戸時代におけるこの町の特色を,堀留川と椙森稲荷神社の存在から把えてみた。東堀留川に沿った細長いこの町は,竹木薪炭・米の集散地として賑わったが,本稿では同じ堀留川に接する堀
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-19971200-00685887

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田商学研究
第40巻第5号
1997年 12月

1997年10月22日掲載承認

日本橋新材木町商業史覚書

——問屋と街——

白石　孝

<要　約>

本稿は，昭和7年に，現在の日本橋堀留町1丁目となった江戸から明治・大正・昭和にかけての古い町，新材木町の商業史視点にたつ歴史的素描である。すでにこの隣の町，新乗物町（同じ現堀留町1丁目）については，本誌40巻4号に記載してあるが，いずれも，拙著の「日本橋界隈の問屋と街」の延長線上にある研究覚書である。

「新材木町」の町名由来記から始まり，江戸時代におけるこの町の特色を，堀留川と椙森稲荷神社の存在から把えてみた。東堀留川に沿った細長いこの町は，竹木薪炭・米の集散地として賑わったが，本稿では同じ堀留川に接する堀江町と比較して，ロケーションがもたらす町の商業活動の相異に着目する。一方，新材木町の東側は椙森稲荷神社があり，下水石新道がある坂道のような裏通りであったために，このあたりの様相は河岸側とは違うということをみて，新材木町はいわば相異なる二面性を持つ町であったことを指摘する。次いで明治期に入って，どのような店がこの町に生れたか，特に洋反物問屋の繁栄がこの町にもたらした影響と町の様相をみる。織物問屋が増え，なかでも杉村甚兵衛がここに大きな拠点を持つに至ったこと，堀留町2丁目の前川太郎兵衛・薩摩治兵衛のような金巾木綿問屋，日比谷平左衛門のような洋糸問屋の発展との関係でこの町をみ，同時にこの町の東側の裏通りに群生する店々にふれ，新しい町の二面性を明らかにする。またこの町と当時の成長品モスリンとの関係に論及する。

こうした織物の発展にともない，新材木町も，多くの織物問屋が生れたが，それは人形町通り界隈の織物問屋街化と軌を一にするものといってよい。新材木町もこの観点から把えられるが，同時に，この町のもつ裏通りの店々をみるとき，人形町通り界隈にとっての生活同心円を形づくる町だったといえるのである。これを各町の生活関連商い業種別店数で明らかにしておいた。

<キーワード>

芝原宿，萬橋，堀留川入堀，材木問屋五ケ所組合，川辺竹木薪炭問屋，多葉粉河岸，椙森稲荷神社，下水石新道，洋反物問屋，金巾，モスリン，椙森新道，杉村甚兵衛，新乗物町，毛斯綸商会，東京モスリン紡織，町の二面性，下町の生活同心円

1　新材木町由来記素描

ここに記述する日本橋新材木町も，江戸から明治・大正・昭和にかけての古い町であった。昭和

7年に，この町は，堀留町2丁目，3丁目，それに前稿に記した新乗物町[1]，及び岩代町などを合併し，堀留町1丁目となったところである。一応，明治44年におけるこの界隈の町を図1－1で示しておく。

図1－1　新材木町ロケーション（太線囲み）明治44年

中央区京橋図書館作成図より

1）白石孝『日本橋新乗物町史覚書』三田商学研究40巻4号。

これで一目してわかるように，かつてはここは東堀留川河岸に接する細長い町であった。この堀留川は東西に分れていた入堀で，全国から江戸に船で送られてくる物資の荷揚場であった。もっともこのうち西堀留川は関東大震災の焼土で早くも昭和4年に埋められ，東堀留川の方は，戦災の復興で昭和24年に埋められ，もはや今日ではその姿はない。しかし，新材木町の由来にしろ，この町の歴史的特色を考える場合には，この堀留川の存在は切り離すことはできない。

「新材木町」の名は「江戸・町づくし稿」によれば，寛永図や正保図に，町割はしてあっても町名は出ておらず，承応図や明暦図で「さい木丁」と記されているとある。[2)] 往古，このあたりは「芝原宿」という村落であったものが，元和年間から材木の荷揚場となったことから，材木商が多くここに住むようになったといわれる。

これについて，日本橋区史では，一説として，寛永図では西堀江甚兵衛町と標してあって，新材木町と記されてないが，これはその訛称ではないかという。[3)] また，このあたりは，紀州頼宜の生母お萬の方の化粧料として附与されたともいわれるが，これは明らかではない。[4)] それはこの河岸から堀留町2丁目に架けてある橋が，「萬橋」といわれたことによるのかも知れない。もっともこの橋の名は様々であった。「御府内備考」や「江戸名勝志」では「堺橋」で，「江戸惣鹿子名町大全」では「堺橋・堺屋小左衛門」というものが架けたる故，とある。[5)] また「伊能測図」では「萬代橋」，嘉永切絵図では「萬橋」とあり，更に「江戸図説」では橋むかいの堀江町に和国餅の店があったことから「和国橋」とも称されてもいた。[6)] しかし，一般には「萬橋」が正称で，俗称を「和国橋」という。そういえば，このあたりは俗称が多い。堀留川のつきあたりには煙草問屋が多かったことから，「多葉粉河岸」といったのもこれである。

それではこの新材木町はどんな特色を持っていたのであろうか。これについては，まず堀留川，次いでこの町にあった椙森稲荷神社にふれなければならない。

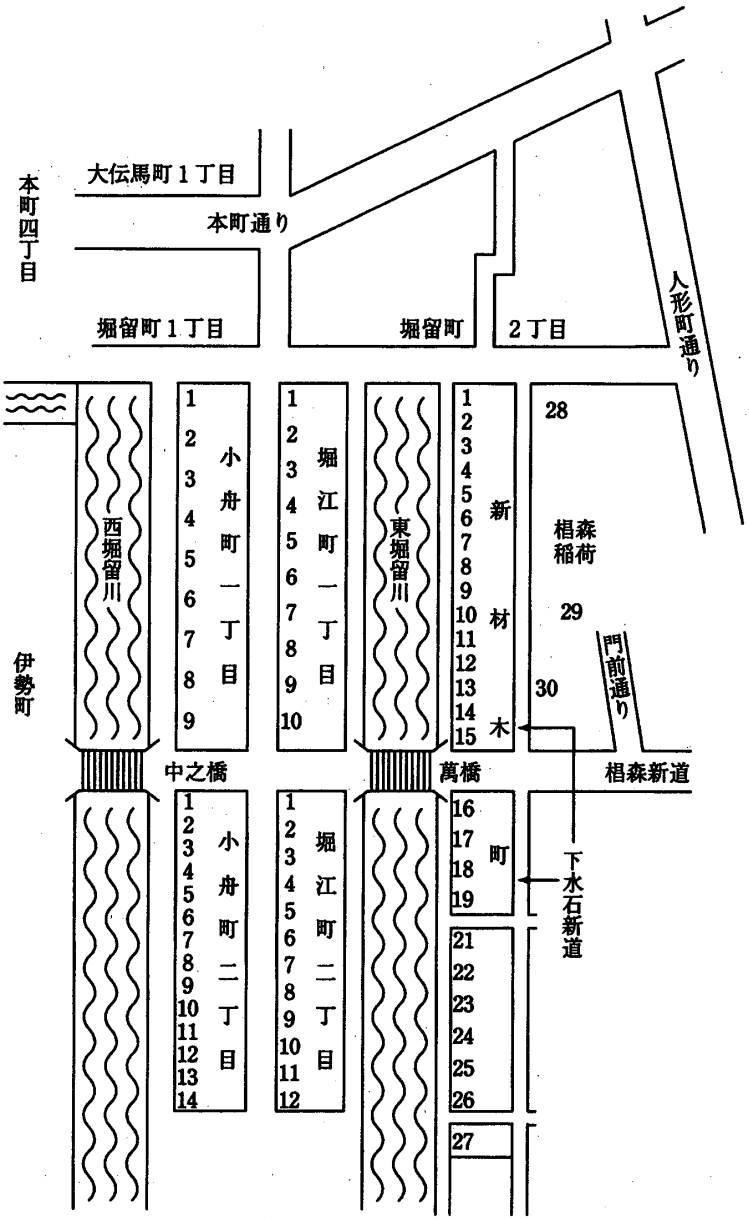
堀留川入堀は，江戸城下町の構築によって，慶長8年に早くも開さくされたもので，東堀留川は一名六十間川ともいわれ，堀留町2丁目までで，延長294間，面積4267坪，幅は最広16間，最狭7間であった。これに平行した西堀留川は堀留町1丁目まで延長205間，面積3625坪，幅は最広19間，最狭8間であった。[7)]

この東堀留川の東河岸が新材木町，西河岸が堀江町，西堀留川の東河岸が小舟町，西河岸が伊勢町である。図1—2はこのロケーションを示す。

---

2) 岸井良衛『江戸・町づくし稿』上巻，青蛙房，昭和40年，p.205。
3) 日本橋区役所『日本橋区史』第1冊，同区役所，大正5年，p.187。
4) 日本橋二之部町会史『町のいしずえ』昭和41年，p.167。
5) この増補江戸惣鹿子名所大全は元禄3年の藤田理兵衛作（江戸叢書刊行会編纂，江戸叢書巻の4に集録）。
6) 綿谷雪『考証江戸切絵図』三樹書房，昭和51年，p.202。
7) 前掲『日本橋区史』p.43。

図1－2　堀留川河岸（番号は寛保時代地番）



この堀留川は日本橋川から入堀開さくされたもので，前述したように，江戸への物資が荷揚され，また各地への輸送の重要な湊口であった。特に，東堀留川の東河岸の新材木町は，その町名の由来のように，材木の集散が盛んであった。江戸城の修築や武家屋敷・町屋の建築に材木の需要は厖大にのぼり，江戸橋から西南の河岸にあった「本材木町」から，その周辺の茅場町や三十間堀，神田材木町，それにこの新材木町に，材木の集散地が広がるに至り，材木問屋の「五ケ所組合」が生れる。

もっとも，新材木町の材木商売は早くも元和元年に川村市左衛門によって始められたといわれる

が[8]，文政元年頃の五ケ所組合のうちの「新材木町組」には，箱根屋喜兵衛，箱根屋清八，箱根屋源兵衛，山形屋儀兵衛，小野田定吉，加賀屋弥兵衛，元大坂町の白子屋甚兵衛，伊東平兵衛，それにこの町の川村市左衛門の名がある。[9]

しかし，材木といっても，この河岸には竹木の類，薪炭も扱う店が多かった。これを「川辺竹木薪炭問屋」といい，この株仲間は江戸で逐年増加すると共に，正徳の頃から，この種の問屋が需要の多い大角材などを扱うようになり，「材木問屋組」と対立抗争をひきおこすが，次第に竹木と薪炭の商いも分離してゆく。

こうして，新材木町は竹木薪炭の集散地として賑わったが，嘉永時には，表１－１のように，むしろ，薪炭問屋が圧倒的に多くなっていったのであった。と同時に，この入堀は米の集散地でもあった。表のように，この町に多くの米屋があったのもこれをよく示している。[10] もっともこれはなにも新材木町だけに限ったものではなく，表１－２のように，対岸の堀江町にも，ほぼ同型の業種集団があった。即ち，米，竹木，薪炭が主で，それに蠟燭，畳表，荒物，水油などの業種の町であったからである。これは堀留川のもつ商業機能によるものにほかならない。

いずれにしろ，この堀留川河岸は，上記のような物資の集散のための土蔵が並び，通称「川岸通り」は荷の運搬に賑わっていた。「江戸名所図会」の「堀留」にはこのいったんを偲ばせるものがあ

表１－１　新材木町諸問屋名（嘉永４年）

業　種	店　名	業　種	店　名
地廻り米問屋	鈴木鉄五郎	薪炭問屋	松田屋弥兵衛
〃	川崎屋千之助	〃	山崎屋定兵衛
米　屋	越後屋政吉	〃	丸屋彦右衛門
〃	植村屋清三郎	〃	永楽屋平右衛門
〃	三河屋久兵衛	〃	川口屋庄兵衛
〃	三河屋平八	〃	大坂屋藤蔵
〃	川崎屋仙之助	〃	梅田屋吉兵衛
〃	鈴木屋鉄五郎	〃	つち屋鉄五郎
〃	能登屋金蔵	〃	山川屋儀助
〃	鈴木屋久吉	〃	山崎屋次郎兵衛
〃	大黒屋兼吉	〃	福田屋由兵衛
〃	越前屋平次郎	藍玉問屋	三河屋藤七
竹木炭薪問屋	山川屋藤人	地掛蠟燭問屋	摂津屋源兵衛
薪炭問屋	永楽屋茂右衛門	表店組畳表青筵問屋	丁子屋甚兵衛

「嘉永４年諸問屋名」（日本橋区史第３冊）より作成

8）木場古文書編纂会『江戸東京材木問屋組合正史』1976年，p.531-532。
9）東京材木仲買編集委員会『東京材木仲買史』東京材木商協同組合刊，昭和41年，p.290。
10）『中央区史』上巻の嘉永４年諸問屋再興時の町別諸問屋数一覧表では，問屋の数が16となっているが，これは表１－１の中での米屋を除けば，ほぼ表と一致する。

表1－2　堀江町諸問屋名（嘉永4年）

業　種	店　名	業　種	店　名
下り米仲買	清水屋新助	薪炭問屋	駿河屋庄兵衛
関東米穀問屋	柏屋伊助	〃	伊勢屋弥三郎
〃	清水屋平吉	〃	越後屋太郎兵衛
雑穀仲買	森川屋伊兵衛	〃	小西屋弥三郎
地廻り米穀問屋	森田屋平兵衛	〃	三河屋栄吉
〃	駿河屋恒吉	水油仲買	油屋伝兵衛
〃	紀伊国屋茂八	蠟燭問屋	葭屋留右衛門
〃	土佐屋彦兵衛	〃	庄兵衛
〃	島田屋佐吉	畳表荒物問屋＊	清水屋九兵衛
〃	川崎屋太兵衛	〃	大和屋直兵衛
米　屋	春日屋伊助	〃	清水屋市郎兵衛
〃	中島屋平吉	〃	太田屋忠助
〃	川上屋源助	〃	島田屋五郎次郎
〃	桝屋吉兵衛	〃	庄兵衛
〃	遠州屋嘉兵衛	苫問屋	大坂屋伝兵衛
竹木薪炭問屋	森田屋仁右衛門	＊堀留組	
〃	遠州屋又兵衛	表1－1と同様，「嘉永4年諸問屋名」（日本橋区史第3冊）より作成	
薪炭問屋	俵屋清次郎		
〃	伝吉		
〃	伊勢屋市兵衛		

ろう。しかしこの図会をよくみると，この川の側岸もさることながら，つき当りの多葉粉河岸にも多くの舟が舫い，土蔵がうち並んでいるのが描かれている。実際，江戸時代には，堀留町1・2町目には，様々な問屋が賑わっていた。今，岸井良衛の「江戸・町づくし稿」により，これらの町の店をみると，表1－3の如くである。

特にここで重要な点は，これら堀留町1・2丁目の北側が，江戸時代の幹線道路の「本町通り」に接していることである。[11] 従って，この多葉粉河岸からすぐ北に入れば，この本町通りに出て，物流の中心街に達する。いわば，新材木町の河岸は，これへの艀のような役割をも持っていたといってよい。すでに前にかかげた図1－2は，これを示しているのであった。

もちろん，新材木町は東堀留川だけに接しているのではなく，町の東側は「下水石新道」を隔てて堀留町3丁目や新乗物町に接し，人形町通りに通ずる。それだけに，新材木町はみかたを変えれば，人形町通りの裏の町にあたる。しかも，ここに椙森稲荷神社がある。こうしたロケーションもまた新材木町の第2の特色といわねばならない。

椙森稲荷神社は「江戸の七森」「七稲荷社」の1つといわれたが，[12] 伝聞によると，ここは小針孫右

11）この通りの意義については，白石孝『日本橋堀留・東京織物問屋史考』文眞堂，平成6年。
12）江戸の七森は竹森・椙森・烏森・初音の森・柳森・あづま森・笠森。『日本橋小伝馬町今昔史，古老聞き書』日本橋小伝馬町二之部町会，昭和56年。

表１－３　堀留町１，２丁目の店（文化文政）

堀留町１丁目	
茶	長崎屋瀬兵衛
〃	湊屋源三郎
紙	湊屋源三郎
鰹節干肴	川村庄左衛門
乾物	川村十兵衛
畳表	清水屋八兵衛
煙草	湊屋仁左衛門
〃	丹波屋忠助
水油仲買	桝屋平八
醤酒酢	横田屋五郎吉
〃	長崎屋瀬兵衛
線香	湊屋源三郎

堀留町２丁目	
釘鉄銅物	奈良屋利兵衛
下り傘	乾屋善太郎
合羽装束	丸茂屋佐七
畳表	壺屋仁兵衛
〃	乾屋九兵衛
〃	和泉屋源八
打物	奈良屋伊兵衛
〃	奈良屋利兵衛
薬種	神崎源蔵
明樽	大松屋孫兵衛
醤酒酢	大松屋孫兵衛
下り雪踏	乾屋善太郎
瀬戸物	溜屋善兵衛

岸井良衛「江戸・町づくし稿」より作成

衛門という町人の屋敷にあった稲荷の小祠で，寛文の頃，火災によりこのあたり一帯が類焼したのに，この小祠のみ残ったことを信仰されるに至ったもので，町家の裏にあり参詣の道がなかったのを本多弾生少弼寺社奉行の時に道がつけられたとある。図１－２の「門前通り」は後に作られたものである。また，新乗物町との間の人形町通りより萬橋に通ずる道が「椙森新道」といわれる。

すでに述べた堀留町２丁目から新材木町東側に入る「下水石新道」は，この椙森稲荷神社の玉垣に沿って通っている道で，花崗岩石が敷きつめてあり，この下を下水が貫流していた「抜道」であったという。[13] この椙森稲荷神社では境内で稽古相撲や富籤興行が開かれていた。幸田成友の「日本経済史研究」では天保初年に出版された「江戸大富集」から江戸の富籤興行を記しているが，新材木町の椙森稲荷神社では，年４回，２・５・８・11月の毎11日に鶴亀松竹梅印を各500枚ずつ札料２匁５分，最高当り150両という興行をしていたとある。その意味では，人形町通りからひっこんだ町の一画にあるこの神社の周辺は，自ら問屋街とは異なった町の様相を持っていたに違いない。従って，このようなところを含む新材木町は，商業的に極端に異なる二つの顔を持っていたのではなかろうか。１つは堀留川河岸の物資の集散区域と，他は「石新道」側や椙森稲荷神社の近辺にみる裏道のごたごたした一画である。

2　明治期の新材木町商店記

明治期における新材木町は，そのロケーションから３つの特色をもつに至る。

13）『新撰東京名所図会』風俗画報第26篇，明治33年，p.16。

第1はこの町の北に隣接した堀留町2丁目に成長をみせた洋反物問屋と軌を一にする織物の大店の出現。第2は川岸通りの側に展開される堀留川利用の業種の店々。第3は人形町通りからの萬橋に通ずる道や下水石新道のような裏道の側に群生する様々な種類の店である。

表2－1は明治27年の「東京諸営業員録」から作成したこの町の商店であるが，堀留町2丁目に接する地番1には，洋反物問屋の丁子屋杉村甚兵衛と金巾木綿問屋の近江屋西沢善七の名がみられる。図2－1をみると[14]，杉村は堀留町2丁目の通りと下水石新道に入る角地にあり，西沢の方は反対側の川岸通りに面した角にあった。いずれも，それらの前面の堀留町2丁目には，金巾木綿問屋の前川太郎兵衛店や薩摩治兵衛店，それに洋糸の大問屋日比谷平左衛門店があり，このような明治期に勃興した新しい織物問屋の立並ぶ街の一画をなしていたということが出来る。しかし，このような織物問屋はまだこの時期には2番地より先にはみられてはいない。表2－1でも杉村・西沢以外には8番地に木綿問屋島崎栄助の店があるだけである。むしろ，その大部分の店は江戸時代からのこの町の特色を残したままであったといえよう。即ち，この表のように，薪炭問屋，米穀問屋，畳表荒物，運漕業，肥料問屋などが町の姿を形作っていたのであった。これに対し，すでに人形町

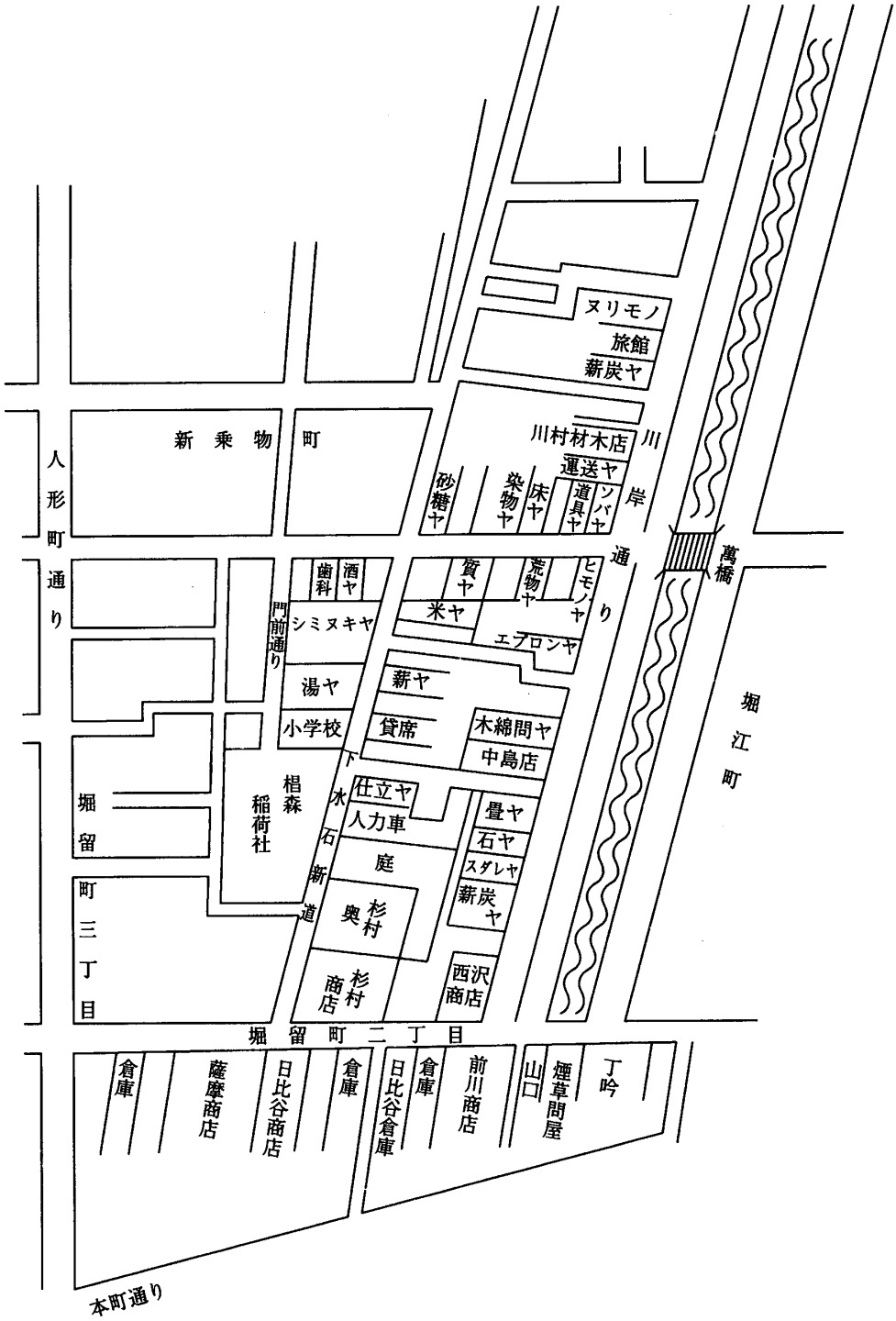
表2－1　新材木町商店（明治27年）

地番	業種	商店名		地番	業種	商店名	
1	洋反物問屋	丁子屋	杉村甚兵衛	14	紙商		山田孫平
1	金巾木綿問屋	近江屋	西沢善七	14	建具職		三宅繁次
2	薪炭問屋	永楽屋	勝呂平左衛門	15	鉄物鍋釜厨爐	紀伊国屋	竹内倉吉
4	米穀問屋	萬屋	高梨萬蔵	15	畳表荒物商		田中八郎兵衛
4	薪炭問屋	川口屋	三原庄兵衛	15	回漕業	三倉屋	三橋喜久造
5	簾商	八幡屋	小池金七	15	炭問屋		石原彦兵衛
8	運送業		北上会社	15	曳船運送		殿村出張所
8	木綿問屋		島崎栄助	16	回漕業・米穀問屋	吉住屋	吉田保太郎
9	石灰蠣灰壁用品	富士屋	石毛亀吉	17	運漕業旅人宿	池新	池田新八
10	運送業		金井運漕店	18	漆器問屋		為永喜一郎
11	金物商		土屋兼吉	18	畳職請負業		初谷金次郎
11	打刃物砥石問屋	丸屋	岡野佐吉	19	安全かみそり	小坂屋	小泉久右衛門
12	染物業		丑木善次郎	28	運漕業米穀問屋 肥料問屋		井田一平
12	運送業		開送組支店				
13	材木問屋		川村市左衛門				
14	厨爐	三收組	奥井和平				
14	公債株券	若松屋	増井久次郎				

賀集三平編「東京諸営業員録」明治27年より作成。重複を除く。

14）この図は椙森神社宮司小林常治氏が84歳の時に，明治25年～30年にかけての記憶により作成した見取図である。しかし，これは前掲『日本橋二之部町会史』に所載されていたものだが不鮮明であり，この原版が現宮司宅にも見当らぬため，筆者が若干補筆したものである。従って正確さが問題になろうが，当時の町の様相を知るには役立つものと思われる。

図２－１　新材木町商店（明治25～30年）



相森神社宮司小林常治氏覚書を元に筆者が附記したもの

通り界隈，特に新材木町の隣の新乗物町には，織物問屋が群生し始めていた。これについては，前稿の「日本橋新乗物町史覚書」をみられたい。

もちろん，この「東京諸営業員録」は，この町の全ての店を記したものではないし，特に下水石新道側のものが少ないので，当時の新材木町の様相を示し得ない。そこへゆくと，明治31年の「日本商工営業員録」はこれよりも多くの店を記載しているし，川岸通り側だけでなく，東裏側にある店々もかかげているので，表２－２でこれをみておこうと思う。

この明治31年の新材木町における商店をみると，前表の明治27年と比較して，前述のような所載の仕方の違いがあるとしても，この町に多くの変化がおこってきたことは確かである。その第１は薪炭問屋とか材木問屋，米穀問屋，運送業のようなこの町の昔からあった業種の店がわずかになり，多種多様の店がみられるようになったことである。第２は表２－１では１番地以外にはなかったような織物関係の店が次第に多く現われるに至ったことである。前述の呉服太物問屋の島崎栄助店（６番地），染絹問屋の福田屋中島伊平店（７番地），太物問屋として11番地の樋口定之助店，14番地の平野吉五郎店，15番地の紀伊国屋竹内周太郎店があり，20番地の呉服問屋西山喜兵衛店などがそれである。また風呂敷問屋美濃屋林末記店（10番地）や足袋股引問屋松坂屋一井茂七店（14番地），袋物問屋中屋池田忠兵衛店（20番地）なども店を開く。これらは人形町通り界隈の織物問屋街化とこ

表２－２　新材木町商店（明治31年）

地番	業　種	商店名	地番	業　種	商店名
①	洋反物問屋	丁子屋　杉村甚兵衛	14	太物問屋	平野吉五郎
①	金巾木綿問屋	近江屋　西沢善七	14	洋反物組合	毛斯綸商会
②	薪炭問屋	永楽屋　勝呂平左衛門	14	足袋股引問屋	松坂屋　一井茂七
3	糸問屋	中西　中村久兵衛	14	畳屋	野村源蔵
④	薪炭問屋	川口屋　三原庄兵衛	⑮	太物問屋	紀伊国屋　竹内周太郎
6	質　商	山定　三原庄兵衛	15	荒物問屋	田中八郎兵衛
⑥	呉服太物問屋	島崎栄助	⑮	貨物運送業	三倉屋　三橋喜久造
7	染絹問屋	福田屋　中島伊平	15	薪炭屋	石原彦兵衛
7	貸席・待合茶屋	山田倉吉	16	酒・油問屋	阪上直吉
8	軸木マッチ問屋	野村宇八	⑯	運送業	住吉屋　吉田保太郎
⑨	石灰蠣灰問屋	石毛とう	16	〃	井田商店　井田一平
9	酒・醤油店	中屋　清水かつ	17	運送・旅館	池田屋　池田新八
10	風呂敷問屋	美濃屋　林末記	18	漆器問屋	上坂長七
10	米　屋	川崎屋　會田信太郎	19	質商	武笠亀次郎
11	穀類干物問屋	中山愛助	19	漆器問屋	新城重吉
11	太物問屋	樋口定之助	20	唐物問屋	藤生東作
12	そばや	松倉吉作	20	呉服問屋	西山喜兵衛
⑬	材木問屋	川村市左衛門	21	袋物問屋	中屋　池田忠兵衛

井出徳太郎編「商工営業録」より作成，業種名の一部は表２－１に同じにしてある。○は表２－１と同じ，但し地番変更注意。

の町の商いとが照応するに至ったことを示すものといってよかろう。

第3はこうした織物問屋の勃興の反面に，この表には，質商とか貸席待合，米屋，そばや，酒屋，畳屋のような店が記されていることである。これらの大部分は，図2－1のように，椙森新道に面していたところが，この町の東側の狭い下水石新道の側にある店々であった。ただ，それらはこの表だけではなく，もっと細かくあったに違いない。この点は大正7年の「日本各種営業者姓名録」の方が詳しい。そこで，これらから業種のみを地番毎に摘出してみると，表2－3の如くである。もちろん，ここでは明治期との店数の単純比較は問題があるとしても，この町の店が大正期に入って増えたであろうことは確かである。それよりも，この表は新材木町の裏道の様相を遺憾なく示しているものとして注目されよう。人力車，裁縫教授，貸席，魚屋，焼芋屋，床屋，灸，産婆，団子屋，髪結，湯屋，駄菓子屋，長唄師匠などである。これこそ新材木町の第3の特色である。

しかし，新材木町といえば，1番地に早くから店を持った洋反物問屋杉村甚兵衛の存在は大きい。この杉村については，すでに拙著で詳しく述べたのでこれに譲るが[15]，ここで特に記しておきたいのは次の3点である。

表2－3　新材木町商店（大正7年）

表2－2と同じもの除く

地番	業　種	地番	業　種	地番	業　種	地番	業　種
6	モスリン仲買	11	木綿卸	14	煙草屋	18	畳表問屋
〃	人力車	〃	焼芋屋	〃	織物問屋	〃	運送
〃	西洋料理	〃	毛糸縫物屋	〃	京呉服問屋	19	金銀細工
〃	裁縫教授	12	風呂敷屋	〃	畳屋	〃	べっ甲屋
7	貸席	〃	煙草屋	15	木綿仲立	〃	太物仲立
8	自転車屋	〃	キャラコ問屋	〃	歯科医	〃	縄・むしろ問屋
〃	線布染糸卸	〃	風呂敷問屋	〃	煙草屋	〃	産婆
〃	煙草屋	〃	莫大小卸	16	車屋	〃	湯屋
〃	魚屋	〃	理髪屋	〃	薪炭屋	20	玩具輸出入
〃	薪炭屋	〃	木炭屋	〃	荒物屋	〃	洋反物問屋
〃	荒物屋	〃	そばや	〃	集荷所	21	洗張屋
9	酒屋	〃	木綿金巾卸	〃	団子屋	〃	駄菓子屋
〃	風呂敷卸	13	洋反物卸	〃	呉服屋	〃	〃
10	太物卸	〃	ミシン製造	〃	魚屋	〃	洋反物卸
〃	越後チリメン	〃	魚屋	〃	呉服屋	〃	しみ抜屋
〃	米屋	〃	洗濯屋	〃	左官屋	〃	木綿金巾仲立
11	雑貨卸	〃	灸	〃	毛織物仲立	〃	人力車
〃	足袋卸	〃	産婆	17	旅館	〃	湯屋
〃	木綿卸	14	洋反物卸	〃	髪結	〃	長唄師匠
〃	煙草屋	〃	繰綿卸	〃	和服裁縫		

大正7年「日本各種営業者性名録」より作成

15）　前掲『日本橋堀留・東京織物問屋史考』4－3及び6－2

その第1は杉村甚兵衛のこの町での開業のいきさつである。初代甚兵衛は文化八年に京都近郊の近江出身の両替商彦左衛門の次男として生れ，友次郎といった。24,5歳の頃に江戸へ出て，本石町3丁目の長崎屋旅館に逗留し，その周旋により富商「丁吟」に奉公し，名を甚兵衛と改める。約11年の奉公により，江戸店では通勤も出来る身分になったが，下向してきた主人の吟右衛門から「甚兵衛は心掛が良くないもの」として別家退身させられる。[16] 弘化3年に甚兵衛は主家と同じ商いを禁じられるところから，合羽装束商を開く。これがこの新材木町1番地であった。ここの買取った店舗が当時100両だったという。[17] 明治10年に養子に迎えられた甥の米次郎が，この二代目甚兵衛を襲名したが，この頃から舶来織物が盛んになり，商いの重点は木綿から洋反物へと移ってゆくにつれ，明治20年代にはすでに杉村甚兵衛店は，「堀留の丁甚」といわれ，洋反物問屋のリーダー的存在となる。特にモスリンに関しては，通旅籠町の堀越角次郎と共に，外商から取引の主導権を奪い，モスリン市場の創出に努め，明治29年にはこの界隈に台頭した多くのモスリン問屋を糾合してその国産化に乗り出すのであった。もちろん，洋反物はモスリンのほかに金巾があり，この輸入販売では堀留2丁目の前川太郎兵衛店や薩摩治兵衛店が大問屋として発展していった。特に薩摩治兵衛はやはり杉村と同様に丁吟に奉公していたが，28年勤続の大番頭で，仕入れから売場まで取締方を勤め，文字通り丁吟の中枢的地位を占めていたが，慶應3年，畿内の木綿仕入れについて主人吟右衛門と意見が対立し，別家退店させられ，しかも賞与金も奉公中の貸与金も出ず，主家丁吟と同種の商いも禁じられる始末であった。これに資金援助をして店を開かせたのが，前述の杉村甚兵衛で，薩摩治兵衛は以後輸入金巾を仕入れて販売し，遂に和洋木綿問屋として成功し，明治32年には，東京の主要織物問屋100店のうち，売上では第1位にランキングされるに至る。また同じ近江出身の前川太郎兵衛も堀留町2丁目で関東呉服太物問屋を営んでいたが，明治に入って金巾を扱って薩摩に次ぐ大店に成長するので，杉村にとっては「最も気のあう友人」であったし，薩摩は後に杉村と縁籍関係を結ぶ。[18] 従って，新材木町商業史には，薩摩，前川は深く係わりを持つものとして考慮されねばなるまい。

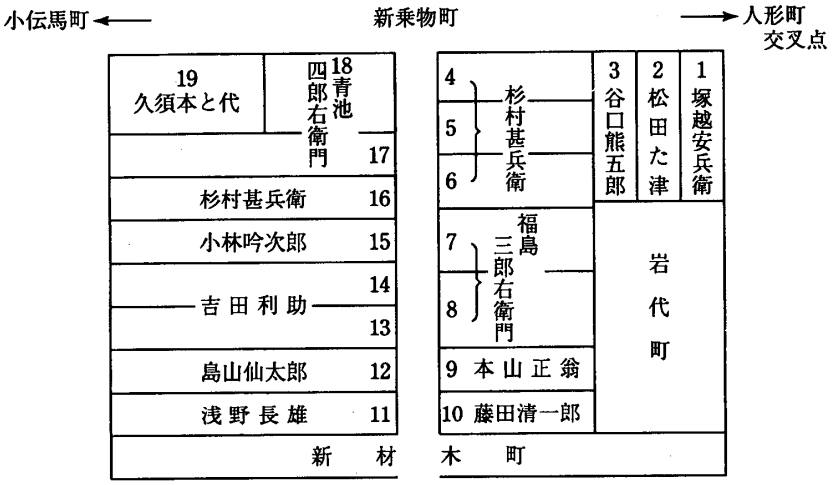
第2は新材木町1番地の西沢善七（金巾木綿問屋）も，前述の薩摩，前川も，そして杉村も，元をただせば，いずれも近江出身者であったことである。滋賀県人史や近江人物志・要覧などをみると，数多くの近江出身者が堀留町を始めこの界隈の町々に進出しているが，なかでも，薩摩，前川はその双壁といってよかった。ただ西沢については実はこれらの人物史には記載がない。それは初代が明らかに近江出身ではあったが，三代目から東京生れの養子により家業が引継がれ，近江との関係が稀薄になったためと思われる。かくして，堀留町2丁目とこれに接する新材木町1番地は近

16）丁吟史研究会編『変革期の商人資本』吉川弘文館，昭和59年，p.139。しかしこの真相はあきらかではない。
17）杉村株式会社『杉村の百二十年』杉村株式会社，昭和42年。
18）白石孝前掲書p.80。

江という同郷の結合や洋反物仲間といった結びつきの濃い関係を持っていたといわなくてはなるまい。

第3はなんといっても杉村甚兵衛は新材木町の中で中心的人物であったが，その所有する土地は日本橋各町にひろがっていた。特に注目されるのは，早くから人形町通りに面する「新乗物町」の土地を取得していたことである。図2－2は明治9年における新乗物の地主である。これについては，すでに拙稿「新乗物町史覚書」でもかかげておいたが，[19] 杉村はその界隈が織物問屋街になっても出店しないのである。地の利からすれば，人形町通りという表通りのこの界隈の方が，新材木町よりは良かった筈なのに，そこに移転も出店もしなかったのは何故なのであろうか。残念ながら，杉村の記録からもこれを明らかにするすべはない。ただ強いていえば，明治前期の多くの富商達が土地を買入れ，その資産価値を期待したように，当時の杉村の土地所有をみると，早くからそこに先見投資の展望を持っていた思えるし，他方では，新材木町1番地はなんといっても堀留町2丁目に接していて，前述のように，薩摩や前川などと洋反物問屋仲間を組むことができたこと，また荷の搬出入にまだ東堀留川を利用することができたという便などを考えられよう。と同時に，新乗物町に新興の洋反物問屋が生れることをむしろ助長し，市場の基盤を固めるのを得策としたともいえる。確かに，杉村のその後の動きをみれば，堀留町2丁目＝新材木町＝新乗物町という商圏を形成していったといってよいからである。新木材町14番地の「毛斯綸（モスリン）商会」はこの象徴的存在というべきものであった。これはモスリン市場がまだ不安定な明治中期に，価格が大暴落して，勃興したモスリン問屋が軒なみに危機に頻したのをみて，堀越角次郎，杉村甚兵衛が主唱してつくった19軒の洋反物問屋仲間組合であり，各問屋が手持の色モスリンを抱えこんでいたのを買取り，市場での価

図2－2　新乗物町地主，明治9年（番号は地番）



「明治9年地主名簿」より

19）白石孝前掲論文三田商学研究40巻4号。

格暴落を抑えようとしたものであった。これが成功したのも，杉村の力に負うところであり，更にこの仲間が母胎となって，杉村の呼びかけのもと，モスリンの初の国産メーカー「東京モスリン紡織株式会社」が設立されるに至る。[20] その意味で，新材木町の「毛斯綸商会」はモスリン織物発展史の上で欠かし得ぬ存在であると共に，明治中期の新材木町の商業的特徴を示すものであった。

3　明治―大正期の新材木町

新材木町は明治30年代から大正期にかけて，町の様相を更に変えていった。すでに述べたように，この時期はこの町一帯が洋反物問屋の発展によって賑わうと共に，人形町通りの裏道の小さな店々が並ぶ町となったが，人形町通り界隈の織物問屋街の一環として，この中に包摂されるようになっていった。

この町の総坪数は，明治５年で2896坪であり，新乗物町のそれとほぼ同じ位であったが，人口は上記のような変化に応じて，明治５年524人，[21] 明治16年664人が大正２年には1056人に増加している。[22] 特にこの大正２年の人口をみると，この界隈では表３－１のように，浪花町や住吉町に次ぐもので，いかにこの町の人口が膨張したかがうかがえる。

表３－１　人形町通り界隈の町別人口

町　　名	明治５年	明治16年	大正２年
	人	人	人
堀留町２丁目	209	192	428
〃　３丁目	165	157	283
新材木町	524	664	1056
新乗物町	364	537	447
岩代町	136	172	256
葺屋町	316	362	530
堺　町	434	314	373
田所町	688	529	721
長谷川町	540	564	943
新和泉町	396	490	710
富沢町	571	409	903
高砂町	443	621	822
浪花町	899	902	1451
住吉町	634	813	1305

明治５年＝東京府資料　明治16年・大正２年＝日本橋区史

20）白石孝『福沢先生と東京織物問屋―堀越角次郎三代記』三田評論1995年４月，及び白石孝『明治期洋反物輸入と東京織物問屋』慶應経営論集14巻１号。
21）東京都『東京府志料』都政史料館，昭和34年。
22）明治16年と大正２年については前掲『日本橋区史』による。

さて，再々述べたが，洋反物，主として金巾とモスリンは明治中期以降の花形商品であり，この市場の飛躍的拡大に伴って，多くの問屋が群生し出すが，大正期に入り，いわゆるその黄金時代を迎えるのであった。その頃の金巾木綿問屋のリーダー的存在は，もちろん堀留町２丁目の丁子屋薩摩治兵衛店，近江屋前川太郎兵衛店であり，またモスリンについては新材木町の丁子屋杉村甚兵衛店を筆頭に，長谷川町の近江屋西村与兵衛店，新乗物町の松屋白石甚兵衛店，富沢町の富屋井上市兵衛店，それに田所町の三河屋山崎作次郎店，和泉屋青木五兵衛店，田所町の太田屋斉藤嘉吉店などが続々大店に成長していった。[23] それだけに，この新木材町にも，杉村のほか，前述した西沢善七（木綿），中村久兵衛（綿糸），長谷川松之助（モスリン生地仲買），中島伊平（染絹織物），小松甚太郎（綿糸染糸），西田為三郎（風呂敷及木綿），高田長左衛門（風呂敷），澤井藤助（太物），保坂須之助（越後縮），多田松三郎（木綿），小泉覚次郎（木綿），久我喜助（木綿金巾），横田久吉（洋反物），松下岩雄（織物），西山喜兵衛（京呉服染絹），大沼辰之助（キャラコ），山田保次郎（洋反物），奥野忠三郎（洋反物），片切与志（木綿金巾），西沢為次郎（洋反物）などの問屋が現われる。こうみると，新材木町という町が，江戸時代に東堀留川に沿ってみせた材木薪炭や米の集散の姿とは全く異なったものへと変ってきたことを示すなにものでもない。この中で澤井藤助は近江出身で本店が愛知郡豊椋村にあり，明治43年に，ここ新材木町に洋反物卸専門の支店を設け，比較的大きな店ということができる。上記の中での西山喜兵衛も近江出身で犬上郡豊郷村の呉服商で，仕入店を京都室町に設けて，ここに進出した店で，ただ大正６年には通油町に移転してしまった。[24] 横田久吉は杉村をリーダーとするモスリン問屋仲間で，東京モスリン紡織株式会社の出資者の一人でもあった。

もっとも，明治31年頃では，織物問屋といえば，この町には呉服太物問屋として，竹内周吉，平野吉三郎，樋口定之助，島崎半助などがあり，洋反物問屋はまだ金巾木綿問屋の西沢善七店とモスリンの杉村甚兵衛店しかなかったから，前述のような比較的大きな洋反物問屋が出て来たのは明治30年代末から大正期にかけてであったということができる。

このような新材木町の商店からみた時代の変化は，土地所有者からもよく示されている。寛保沽券図でみる地主はわかっているものの，その職業や住所は明らかではない。ただ３番地の源兵衛というのは材木商箱根屋源兵衛だろうし，続く４・５番地は同じく材木商の箱根屋喜兵衛，６番地は薪炭商の梅田屋吉兵衛であったとみられる。とすると，やはり，この町は江戸時代，町名のように，材木・薪炭のような業者が土地を所有していたということができよう。しかし，明治になると様相は変る。表３－２は，明治九年の地主名簿と明治45年の地籍台帳にみる土地所有者リストである。

明治９年のそれは杉村甚兵衛のような洋反物問屋や服部吉兵衛という薬種問屋，森岡平右衛門の

23） これについては拙稿前掲論文『明治期の洋反物輸入と東京織物問屋』に詳述。
24） 澤井藤助及び西山喜兵衛については『滋賀県人物史』大正８年，p.1237 及び p.159。

表3－2　新材木町地主（明治）

明治9年地主名簿				明治45年地籍台帳			
地番	居住地	氏　名	備　考	地番	居住地	氏　名	備　考
1	居	杉村甚兵衛	洋反物問屋	1	居	杉村甚兵衛	前出
2	居	勝呂平左衛門		2-1	居	勝呂平左衛門	前出
甲	居	杉村甚兵衛	薪炭商	2	居	杉村甚兵衛	
3乙	居	三原庄兵衛	薪炭問屋	3	居	〃	
4	堀留2丁目	小林吟次郎	木綿問屋	4	居	三原庄兵衛	前出
5	居	三原庄兵衛		5	堀留2丁目	小林合名	前出
6	深川	鹿島清兵衛	鴻池銀行	6	居	杉村甚兵衛	
7	本町	柏原多兵衛		7	居	中島伊平	染絹問屋
8	出堀江町	服部吉兵衛	薬種問屋	8	居	杉村甚兵衛	
9	神田	村田政延		9	居	〃	
10	錦町	森岡平右衛門	銅鉄問屋	10	四日市市	村田七右衛門	
11	出堀江町	服部吉兵衛		11	本材木町	森岡平右衛門	前出
12	居	奥田弥兵衛		12	堀江町	服部吉兵衛	前出
13	居	〃		13	居	杉村甚兵衛	
14	葺屋町	長塚甚太郎		14	〃	〃	
15	深川	太田徳三郎		15	伊勢町	塚本合名会社	絹綿布問屋材木商
16	居	太田惣吉	質商	16	居	太田はなえ	太田徳九郎妻
17	居	〃		17	新右衛門町	太田惣吉	前出
18	深川	加藤茂兵衛		18	〃	〃	
19	本石町	松沢とみ		19	下谷	辻八五郎	下谷銀行
20	出堀江町	服部吉兵衛		20-1	居	端文治郎	東京モスリン紡織
				2	一	山田保治郎	
				3	居	加藤政次郎	
				4	居	定地政吉	
				5	田所町	武井寛之	
				6	居	中井盛太郎	
				21	堀江町	服部吉兵衛	

居は新材木町居住者，備考は筆者調べ。

銅鉄問屋，それに太田惣吉のような質商が現われるし，明治45年ともなると，杉村甚兵衛が地番の1，2－2，6，8，9，13，14を所有するに至る。また，20－1番地の端文治郎は三井物産から東京モスリン紡織株式会社に出向した社員で，同社への出資者の1人であったことも，この時代を物語るものであるといってよかろう。

こうして，明治30年代から大正にかけて洋反物問屋の繁栄は，この新材木町を新しい町へと変貌させることになったが，この織物・糸の集散に堀留川が利用されるようになったことは，金巾木綿問屋の大店前川太郎兵衛店や洋糸問屋の大店日比谷平左衛門，中村久兵衛などが杉村と共に，川岸通りに荷の搬出入場を作り，南の方には，井田，池田，吉田などの運漕業者が軒を連ねていたことにも示される通りである。

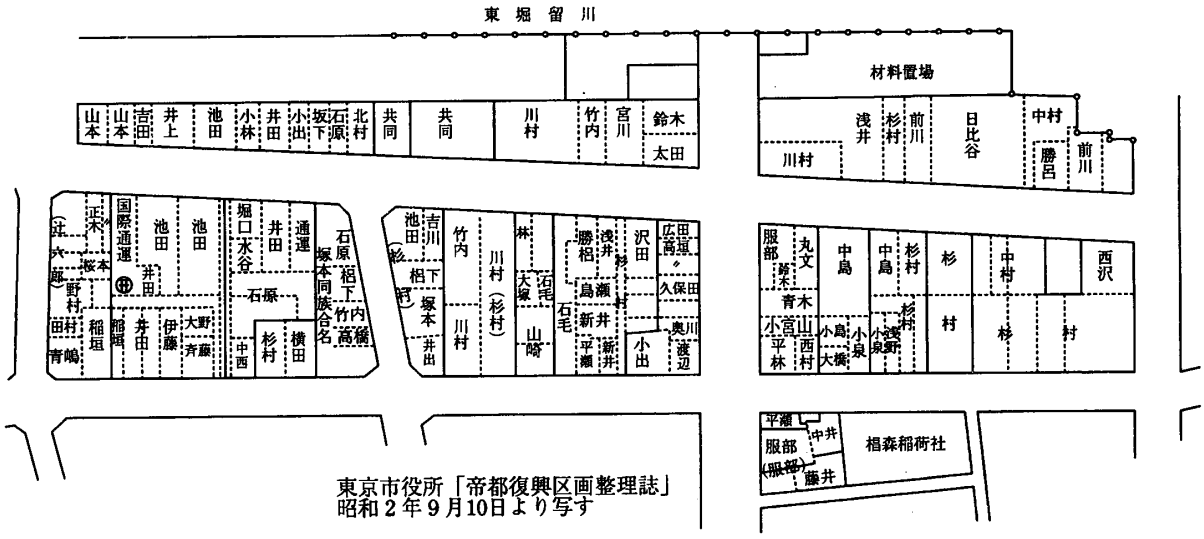
もちろん，堀留川は明治期に洋反物だけではなく銅鉄の運搬にも利用されたこともある。銅鉄問屋が堀留町・小伝馬町・大伝馬町・通油町などに多かった関係で，この入堀川の水運が利用されたけれども，この川が潮の干満の差が激しいため艀が入れられないこともあったし，陸上げ後の運賃費用もかさむところから，次第にその運搬には桜川筋が利用されるようになったようである。[25)]

そこで，改めて，大正期の新材木町の様相をみるため，図３－１をみてみよう。これは東京市役所による「帝都復興区画整理誌」による昭和２年頃の新材木町の土地所有者図である。[26)]

いずれにしろ，ここに最後に指摘したいのは，この古い町，新材木町は大正期には，堀留町・人形町通り界隈の織物問屋街の一画をなしつつ，この界隈の生活圏の一端を形づくっていたということである。この後者こそ，新材木町のもっている町の１つの重要な側面だったといいたい。これを裏づけるものとして次の表３－３の「人形町通り界隈各町の生活関連商い業種別店数」である。これはこの界隈が完全に織物問屋街化し，商勢もまさに黄金時代を迎えた大正７年当時のものである。周知のように，当時の問屋街は住店不分離であり，町の住民は自己完結型の生活圏を持っていたから，食料，身廻品，医薬衛生，住居家具，金融，趣味など全ては自分の住んでいた町の界隈で充足されていたのである。しかし，町別にみれば，こうした店がめだって多い町とそうでない町とがあるわけで，人形町通り界隈では，堀留町や田所町，長谷川町，新乗物町では問屋が主で，生活関連の店々は，葺屋町，堺町，新和泉に多いが，新材木町はこの中で群をぬいていたといわなければならない。それは江戸時代から実はこの町のもっていた堀留川側と東の椙森稲荷神社裏の二面性の故である。

まさに新材木町は人形町通り界隈にとっての生活同心円を形づくる町といえる。これがまた大き

図３－１　新材木町区画確定図（昭和２年）



東京市役所「帝都復興区画整理誌」
昭和２年９月10日より写す

25)　『中央区史』中巻　pp.464-465。
26)　東京市役所『帝都復興区画整理誌』昭和２年９月10日議決のものの写し（京橋図書館郷土資料室）。

表3－3　人形町通り界隈各町の生活関連商い業種別数（大正7年）

町　名	食料関係	身廻品	医薬衛生	住　居	金　融	趣　味	計
堀留町1丁目	1	0	0	1	0	0	2
〃　2丁目	2	6	1	2	3	2	16
〃　3丁目	5	6	1	0	1	1	14
田所町	0	13	1	0	4	2	20
長谷川町	3	10	2	4	1	0	20
新乗物町	4	8	2	0	2	0	16
新材木町	10	12	9	8	0	6	45
岩代町	2	6	2	0	0	2	12
葺屋町	7	7	4	3	1	2	24
堺町	5	23	4	0	1	3	36
新和泉町	17	15	4	3	1	2	42

食料関係　（米，魚，八百屋，豆腐屋，乾物，酒，牛乳，肉，鳥，茶，パン屋，菓子，料理など）
身廻品　（小間物，履物，洋品，帽子，呉服，仕立，化粧品，時計金属，洗張，判コ屋，花など）
医薬・衛生（医院，薬屋，湯屋，髪床，あんまなど）
住居　（建具，家具，炭，ガラス，桶，荒物，仏具，車，古物）
金融　（銀行，質屋）
趣味　（習いごと，本，煙草など）

く様変りするのは，関東大震災後の復興過程でみられてゆく住店分離，町の自己完結型の解体，物流運搬の変化＝堀留川利用の変貌にほかならない。